

# 命題類への指示

緒方 典裕

## 1 序

本稿では、命題<sup>1</sup>やイベント<sup>2</sup> という抽象物<sup>3</sup> への指示と照応の原則について明らかにする。特に非動詞派生名詞による指示についても考察する。まず、イベント類と命題類というカテゴリーを特徴づけ、そして、その共起する述語のタイプから、それぞれ「イベント・過程・行為・行為継続」、「命題・不定命題・内容・説・事実」、という下位カテゴリーに分類する。次に、それぞれどのような直接指示・照応が行われるかを、特に、本来、イベント類や命題類を指示できない名詞が命題類を指示する場合を示し、その形式的説明を与える。つまり、使用状況から独立したカテゴリー変換の関数が関与している場合と、使用状況に依存した指示関数が関与している場合を区別する。非動詞派生名詞による指示はこのような指示関数がどのように関るかで、大きく三タイプに分類される。そして、それが対話においてどのような役割を果たしているのかを明らかにする。

## 2 先行研究

### 2.1 文や動詞関連語彙による命題類・イベント類への指示

命題 (proposition) というカテゴリーがイベント (event) というカテゴリーとは区別されるものであるという議論で、言語学的な証拠に基づくものとしては Vendler (1967) があ

<sup>1</sup>恐らく言語学やその周辺分野において「命題」という用語が広まったのは、Fillmore (1968) の「格文法」以来であろう。Fillmore (1968) は、文の意味を「命題」と「モダリティ」からなるとした。中右 (1994) の「階層意味論」でも「命題内容」とは「モダリティ」と対立する、「文の客観的な意味成分」としている。

この生成文法的な意味論とは別のもう一つの大きな意味論の潮流である形式意味論や哲学的意味論では、アリステレス『命題論』以来の「命題」という概念を基本的に用いている。つまり、否定や肯定できるもの、もしくは真偽判断の対象となるもの、という定義である。

もう一つの「命題」の使い方とは、この両方の考えを錯乱して用いるというもので、その場合、ほぼ未定義状態で用いられている。つまり、「命題とは何か」という問いは哲学的な問題であり、言語学者の関知するところではないというわけである。しかし、「命題とは何か」という問いは言語学者がその論文がその概念に依存している以上、避けて通れない根本的な問題であることは間違いない。

<sup>2</sup>自然言語の意味論にその指示対象としての event という用語を用いたのは、Davidson (1980) や Vendler (1967) に遡る。

<sup>3</sup>命題類やイベント類は、国語学や日本語学における「こと・もの・さま」という名詞の分類における「こと」の下位分類にあたる。従って、「さま」の下位分類にあたる、「性状・状態・状況」といった抽象物は本稿の扱う範囲ではない。

る。その主張は、factを表すofを取る動名詞句、that-節等と、eventを表す、ofをとらない動名詞句等は、それぞれ、命題態度的な述語 (be unlikely, know, ...) と因果関係・生起・時間・様態述語 (cause, occur, take place, be sloppy, be gradual, ...) というように、共起する述語が違うという観察に基づく。

- (1) a. *John's playing poker* is unlikely.  
 b. *John's playing of poker* is sloppy.  
 c. \* *John's playing of poker* is unlikely.  
 d. ? *John's playing poker* is unlikely.
- (2) a. \* *That John died* occurred at noon.  
 b. \* *John's having died* occurred at noon.  
 c. *Many violent sackings of the city* took place from 1000 to 340BC.

但し、次のように派生名詞 (derived nominal) は event と proposition に関して曖昧になる。

- (3) a. *The collapse of the Germans* was gradual.  
 b. *The collapse of the Germans* is unlikely.  
 c. \* *That the Germans collapsed* was gradual.  
 d. *That the Germans will collapse* is unlikely.

Peterson(1982) は、さらに fact, proposition, event を同様の方法で区別した。<sup>4</sup> Asher(1993) は、Vendler(1967) が fact と呼んだものを *propositional entity* とし、それをさらに次のように再分類した。<sup>5</sup>

<sup>4</sup>Peterson(1982) の分類基準となる factive predicate, propositional predicate, eventive predicate は、次の如くである。

- factive predicate: - matter, - amuse, - explain, discover -, realize -, remember -, know -, hear -, explain -, - be tragic, -be important, -be significant, -be crazy, -be odd, -be mysterious, -be a result, -be a fact, etc.
- propositional predicate: - seem, believe -, - be likely, fear -, hope -, want -, think -, affirm -, deny -, -be unlikely, -be possible, -be impossible, -be consistent, -be inconsistent, -be sure, -be true, -be certain, -be a proposal, -be a hypothesis, etc.
- eventive predicate: - occur, -follow, follow -, -obtain, -last, -begin, -end, -happen, -take place, -cause -, delay-, -be quiet, -be noisy, -be quick, -be slow, -be sudden, -be prolonged, -be gradual, -be sloppy, -be deliberate, -be violent, -be an act, -be an action, -be an activity, -be an event, -be a process, -be a occurrence, be a happening, etc.

<sup>5</sup>Kiparski & Kiparski(1970) の研究を考慮すると、この分類において proposition, projective proposition を取る述語は non-factive predicate であり、fact を取る述語は factive predicate である、ということになる。また proposition/projective proposition と fact それぞれにおいて、for-to 不定詞句を取れる emotive predicate と取れない non-emotive predicate に分類され、さらにカテゴリーが factive emotion と propositional emotion といったものに細分化されるかもしれない。

- Proposition: (直接法の)that 節によって指示され, be true, believe, be certain, doubt, say, imply, doubt, deny, know, entail などの述語と共起する。動名詞句によっては指示されない。
- Projective Proposition: 不定詞句や接続法の that 節によって指示され, ask, be necessary, wonder, want, desire, command, plead, entreat, permit, allow, などの述語と共起する。
- Fact: that 節, of を取らない動名詞句, 派生名詞句によって指示され, indicate, show などの述語と共起する。

これらの研究においては文や文の名詞化という観点から指示や照応が論じられており, 結果的に節・不定詞・動名詞・派生名詞などの動詞と密接な文法範疇にのみ言及されている。しかし, 動詞や文と関係が無い名詞もまたイベント類, 命題類等を指示できる。本稿では 4 節でこれについて深く論ずるが, 次にそれを説明する道具立てとしてのメンタル・スペース理論 (Fauconnier(1985)) を紹介する。

## 2.2 open connector と closed connector

Fauconnier(1985) は次のような照応現象を説明するために, *open connector* と *closed connector* という二種類の解釈関数を定式化した。

- (4) a. *Plato* is a great author. *He* is on the top shelf.  
b. *Plato* is on the top shelf. *It* is bound in leather. You will find that *he* is a great author.  
c. *The mushroom omelet* left without paying. *He* jumped into a taxi.

(4a-4b) は特定の文脈は必要ないが, (4c) は 'the mushroom omelet' を注文した客がいて, それ逃げたという文脈が必要である。そして, (4a) では 'he' によってプラトンの本を指示し, (4b) では 'Plato' でプラトンの本を指し, 'he' でプラトン本人を指し, 'it' でプラトンの本を指しているが, (4c) では 'The mushroom omelet' と 'he' はともに逃げた客を指している。Fauconnier(1985) の説明では, 'Plato' はプラトンという人を指示し, それを 'he' で照応し, そこに,

$$f: \text{著者 } x \mapsto x \text{ の著作}$$

という関数が働き, プラトンの著作である本という解釈がえられる, もしくは 'Plato' に  $f$  が適用され, それ自体がプラトンの著作物を指示できる。つまり, この解釈関数は適宜

適用可能である。しかし、‘The mushroom omelet’ は文脈に応じて先に

$$g: \text{食べ物 } x \mapsto x \text{ を注文した客}$$

という関数が働き、そこでマッシュルーム・オムレツを注文した客という解釈になり、それを ‘he’ で照応している、ということになる。このように照応の先行詞に、文脈に応じて適用される解釈関数を closed connector といい、照応詞もしくは先行詞に適宜適用される解釈関数を open connector という。従って、次の談話は不適格となる。

(5) *The mushroom omelet left without paying. \* It was inedible.*

*The mushroom omelet* にはすでに closed connector  $g$  が適用され、オムレツを注文した客を指示しており、そのため *it* でオムレツ自体を照応できないのである。

本稿では Fauconnier(1985) の区別を次のように一時的な使用状況に依存しているか、それとも恒久的な辞書的・言語的知識に依存しているかという観点から区別し、再定式化する。

まず、指示対象  $x$  があるカテゴリー  $C$  に属しているということを

$$x : C$$

と表記する。

指示対象とそれが属するカテゴリーを区別した場合、Fauconnier の区別は違ったとらえかたをすることができる。closed connector は、一時的な使用状況における指示対象自体の関係に依存しており、指示対象のカテゴリーには依存していない。つまり、どのような表現でも基本的にどのようなカテゴリーの指示対象も指示しうる。従って、connector に指示対象が属するカテゴリーの情報は必要なく、次のように指示対象から指示対象への関数とみなすことができる。

$$g: x \mapsto y$$

これは Barwise(1993) の *channel* という対象自体の関数と同様の物である。従って、*channel* と呼ぶことにする。*channel* は各言語使用毎にその使用状況において固定されるものである。

一方、open connector は辞書的な知識や言語知識などの恒久的な知識に依存している。この場合は、個々の指示対象よりもカテゴリー間の関係の情報が重要になり、次のようにカテゴリーからカテゴリーへの関数とみなすことができる。

$$f: C_1 \Rightarrow C_2$$

これは Barwise(1993) の *constraint* という関数と同様の物である。従って, *constraint* と呼ぶことにする。

そして, *channel* と *constraint* が同時に適用される場合を, 次のように表記する。

$$f(g) : (x : C_1) \implies (y : C_2)$$

例えば, Plato の例では, 次のような *channel* と *constraint* が作用している。

$$f(g) : (x : \text{著者}) \implies (y : \text{著作})$$

しかし, オムレツの例では次の *channel* しか作用していない。

$$g : x \mapsto y$$

$x$  はその状況で注文されたあるオムレツで,  $y$  はそれを注文した客である。

日本語では, 英語と違い, 照応詞に対して *open connector* つまり, *constraint* は適用されない。

- (6) a. 漱石は著名な作家である。\*彼は本棚にあるよ。  
b. 漱石という人は著名な作家である。\*その人は本棚にあるよ。

しかし, 普通名詞や固有名詞に対しては適用できる。

- (7) 漱石は本棚にあるよ。

*closed connector*, つまり, *channel* は英語と同様に適用できる。<sup>6</sup>

本稿では, このような解釈関数を命題類・イベント類に対しても適用し, 非動詞派生名詞によるこれらの抽象物への指示を説明するだけでなく, さらに, 中右(1994)のような構造化された指示対象として扱う必要性を対話における命題類への指示の観察から示す。

### 3 日本語における命題類・イベント類の分類

日本語において命題類やイベント類をカテゴリー化するためには, 日本語におけるカテゴリー分類の条件を論じる必要がある。本節は, まず, 動詞由来の名詞類について考える。但し, 日本語の場合, 動詞由来の名詞類とは「サ変動詞」の語幹<sup>7</sup>・和語動詞の連用形が名詞的に用いられているものをいうことにする。

<sup>6</sup> 田窪(1992)では, レストランの限られた場面で「かつどんが食い逃げした。」でカツ丼を注文した人を指示するような用法は可能であるとしている。

<sup>7</sup> 「を」も含める。

まず、日本語において名詞が指示する動詞由来の名詞がイベント類指示か命題類指示であるかは、次の条件によって特徴づけることができる。これは、2節で述べた Vendler(1976)等の英語におけるイベント類と命題類の違いの特徴づけと同様である。

- イベント類:「節+た+ (という) こと・の」で置き換え不可能である。「回・度 (ど・たび)」という助数詞によって量化できる。
- 命題類:「節+た+ (という) かという こと」で置き換え可能である。「回・度 (ど・たび)」という助数詞によって量化できない。「つ」などで量化できる。

さらに、イベント類は、次の条件によって次のカテゴリーに分類できる。

- イベント:「が起こる, が起きる, を引き起こす, が発生する」といった述語に選択される。
- 過程:「が始まる, が続く, が終わる, が止まる, が繰り返される」といった述語に選択される。
- 行為:「をやる, を行う, ができる, が簡単だ, が難しい, に懸命だ, に必死だ」といった述語に選択される。
- 行為継続:「を始める, を続ける, を終える, を止める, を繰り返す」といった述語に選択される。

命題類は、次の条件によって次のカテゴリーに分類できる。

- 命題:「節+ (という) {こと・の}」で置き換え可能で、「本当だ・正しい・間違っている・誤りだ・事実だ・常識だ・嘘だ・当然だ・确实だ・問題だ」といった述語に選択される。
- 不定命題:「節+かどうか (ということ)」で置き換え可能で、「疑問だ ((について) 分からない・(について) 不明だ・(について) 知らない)」といった述語に選択される。
- 説:「節+ (の) ではないか (な)・(の) ではあるまいか・(の) かしら+と (いう N)」で置き換え可能な場合、但し、Nは「こと、説、仮説、推測、考え、考え方、疑問、気、懸念、心理、疑念、疑い」など。「ある・(を) もつ」などの述語に選択される。
- 事実:「節(過去)+という {事実・の・こと}」で置き換え可能で、「(を) 物語っている・(を) 忘れる・(を) 認める・(を) 認識する・(を) 悟る・(に) 気付く・(を)

記録する・(を) 証明する・(を) 知っている・(を) 聞いている・(を) 分かっている」などの述語に選択される。

- 内容: 「節+という {N・こと・の}」等で置き換え可能で、「まわりくどい・単純だ・お粗末だ・シンプルだ・論理的だ・筋が通っている・を聞く・面白い」などの述語に選択される。但し、Nは「話、噂」などである。

動詞由来の名詞は、命題を指示するかイベントを指示するか、共起する述語によって曖昧であるというのは日本語においても事情は同じである。

例えば、「ソ連の崩壊」は二通りの読みがある。

- (8) a. ソ連の崩壊が起こった。
- b. ソ連の崩壊は事実だ。

(8a) は「イベント」であり、(8b) は「命題」である。それは、次のように「ソ連が崩壊したこと」や「ソ連が崩壊したの」という命題内容を表した句が、(8a) には代入できないことから裏付けられる。

- (9) a. \*ソ連が崩壊したこと/のが起こった。
- b. ソ連が崩壊したこと/のは事実だ。

但し、和語動詞の連用形に由来する名詞では、語彙毎にイベント指示に使えるか、命題指示に使えるかは違う。

- (10) a. 激しい揺れが起こった。(イベント指示)
- b. ?激しい揺れは事実だ。(命題指示)
- c. このドアはしまりが悪い。
- d. \* このドアのしまりが起こった。(イベント指示)
- e. \* このドアのしまりは事実だ。(命題指示)

次に各カテゴリーについて例をまじえて詳しく見ていくことにする。<sup>8</sup>

<sup>8</sup>例文の [X,Y] の X は出典を表し、Y は頁を表す。DPR94S は『Dos/V Power Report』94年夏号、TW9412 は『Tech Win』94年12月号、「渤海」は『渤海国の謎』(上田雄)、「柳田」は『柳田国男の読み方』(赤坂憲雄)、「原日本人」は『アイヌは原日本人か』(梅原猛・埴原和郎)、「アイヌ学」は『アイヌ学の夜明け』(梅原猛・藤村久和編)、「銅鑼」は『対談：銅鑼』(森浩一・石野博信)、「噂」は『噂のなんじゃもんじゃ』(武澤忠)、「日本語」は『対談集：日本語と日本人』(司馬遼太郎)、DU9 は『Dos/V User』9号である。何も表記が無いものは、著者の直観による。

## 3.1 イベント・過程・行為・行為継続

イベント類を表す動詞由来の名詞 イベント類の下位カテゴリーである「イベント・過程・行為・行為継続」は互いに区別されるとともに、互いに密接な関係がある。次のようにイベントは「ソ連の」という特定性を強調する表現を付けることができ、特定性が高い。

- (11) a. ソ連の崩壊が起こった。(イベント)  
 b. \*ソ連の崩壊が続いた。(過程)  
 c. \*ソ連の崩壊をした。(行為)  
 d. \*ソ連の崩壊を続けた。(行為継続)

しかし、「東欧諸国の」のような複数性を伴ったりして、特定性が下がれば、その個々のイベントの連続自体を過程とみなすことができるので、過程を指示しうる。その場合も、複数のイベントをある一つのイベントとみなすことでイベントも指示できる。

- (12) a. 東欧諸国の崩壊が起こった。(イベント)  
 b. 東欧諸国の崩壊が続いた。(過程)  
 c. \*東欧諸国の崩壊をした。(行為)  
 d. \*東欧諸国の崩壊を続けた。(行為継続)

従って、次のような過程からイベントへの constraint を想定できる。

過程 ⇒ イベント

一方、行為・行為継続の場合、行為主は文全体の主語でなければならず、それは逆にイベントや過程は許されない。

- (13) a. \*ロシアはチェチェンへの攻撃が起こった。(イベント)  
 b. \*ロシアはチェチェンへの攻撃が続いた。(過程)  
 c. ロシアはチェチェンへの攻撃をした。(行為)  
 d. ロシアはチェチェンへの攻撃を続けた。(行為継続)

また、上の例のように「チェチェンへの」のような修飾語の特定性は行為と行為継続の違いには反映されない。

また、行為主を名詞句内に表現し、名詞句自体が主語になれば、イベントや過程への指示は可能となる。

- (14) a. ロシアによるチェチェンへの攻撃が起こった。(イベント)



- b. ロシアによるチェチェンへの攻撃が続いた。(過程)
- c. \* ロシアによるチェチェンへの攻撃をした。(行為)
- d. \* ロシアによるチェチェンへの攻撃を続けた。(行為継続)

これらのカテゴリーの違いはアスペクトとも関っている。例えば、「シュート」のような瞬間的行為を表す名詞では、反復した行為を表さない限り、「の終わり」とは共起できないが、「ドリブル」のような行為継続を表す名詞類では「の終わり」と共起できる。

- (15) a. \*シュートの終わり/\* ソ連の崩壊の終わり
- b. ドリブルの終わり/東欧諸国の崩壊の終わり

従って、行為は反復した行為を表すときに行為継続と解釈できるので、次のような制約が想定できる。

行為 ⇒ 行為継続

イベント類を表す「こと」 命題類とイベント類を区別する条件として「た+こと」で言い換えられないということがあった。しかし、次のような場合の「こと」句、つまり、「形容詞終止形+こと」や「終止形節+(という) こと」では「起こる・する」と共起でき、イベント類を指示しているといえる。

- (16) a. {ひどい・悪い・いい} ことが起こる。
- b. {ひどい・悪い・いい} ことをする。

- (17) a. 今のように思わぬときに役立つということがあるんですね。[「銅鑼」:26]
- b. アンジェリスは、アイヌの資料をイタリアにもち帰るということはなかったのですか。[「アイヌ学」:216]

### 3.2 命題・不定命題・事実・説・内容

本稿の命題類の分類は、2節で示した Asher(1993) をさらに日本語の文法の観点からさらに細分化したものである。不定命題・説・内容が Asher(1993) の Projective Proposition に相当する。<sup>9</sup>

<sup>9</sup>Projective Proposition には「欲」や「祈願」というカテゴリーも含まれるが、本稿では扱わない。これらは次のような特徴づけが可能である。

- (i) 欲:「節+た {い・かった} というN」等で置き換え可能で、「Xに (が) ある・激しい・強い」などの述語に選択される。但し、Nは「欲、欲望」などである。

命題 次が命題を指示する動詞由来の名詞とその節による言い換えの例である。

(18) a. 米軍の出兵は確実だ。

b. 米軍が出兵 {する・(した)} {こと・の} は確実だ。

(19) それでも近い将来、北九州市などを含めて北部九州の水不足は確実だ。[朝日新聞, 1983年2月25日]

(ii) 祈願: 「節+て {欲しい・くれ・くれないか} という {N・こと・の}」等で置き換え可能で、「Xに {が} ある・{を} する」などの述語に選択される。但し、Nは「願ひ、頼み、依頼、祈願」などである。

また、日本語に関する節の分類や節を取る動詞の分類もいくつかある。

久野(1973)では、節+「こと」は話し手が真と前提している命題を抽象化して表しているが、節+「の」は話し手が真と前提している行為・状態・イベント自体を表し、節+「と」は真であるという前提が無い、知覚動詞は節+「の」を取る、命令の動詞は節+「こと」を取る、などとした。

Smith(1970)では、節+「と」を取る動詞を次の4種類に分類している。

- (1) Quote verb: 暗示する・説教する・発表する・答える・つぶやく・伝える
- (2) Indifferent factive: 嘆く・疑う・推定する・自白する・聞く・信じる
- (3) Belief verb: 思う・みなす・考える・信じる・感じる
- (4) Un-factive: 早合点する・勘違いする・誤解する・噂する・予言する

Nakau(1973)では、名詞がとる節と述語が取る節を熟考し、「こと・の・ところ」等は名詞として働き、noun sentential complementation であるとし、「と・ように」は predicate sentential complementation であると分類し、またどのような変形規則が適用されるかという観点からこれらを細分類化している。

Harada(1972)では、次のような節の意味的分類が行われている。

- (1) Content Clause: と主張する・て欲しい
- (2) Result Clause: -させる
- (3) Phenomenon Clause: のを見る
- (4) Fact Clause: のが残念だ・ことを思い出す
- (5) Proposition Clause: ことを否定する

Content Clause は主張や願ひの内容で、Result Clause はイベントの結果の状態で、Phenomenon Clause は知覚対象としての現象であり、Fact Clause は話し手の前提を表し、それ以外が Proposition Clause である。

Josephs(1972)では「こと」と「の」の違いは directness という特性によって示され、「の」は直接の感覚知覚や、即時性・話し手の強い確信を表し、「こと」は心的活動などによる間接的知覚や、遅れた、遠退いた感覚、弱い確信を表し、それぞれ 'direct', 'indirect' として区別されるとした。

Inoue (1974) では Karttunen の implicature の分類に基づいて、節を取る動詞を次のように細分類化している。

- (I) Factive verb: {こと・とということ} が意味する・が示す; {こと・とということ} を否定する・を隠す・を考慮する・を覚える・を理解する; {の} が鮮やかだ・が印象的だ・が可愛い・が奇麗だ・が目立つ・をまねる; {こと・とということ・の・と} 有名だ・にびっくりする・に腹を立てる; {の・と} が怪しい・が不可解だ・が不思議だ; {こと・の} を祝う・を悔いる・を惜しむ; {こと・と・の} を無視する・を思い出す・を知っている・を忘れる・を予知する
- (II) Conditional Factive verb: {こと・とということ} が矛盾する・が有意義だ・が重要だ; {こと・とということ・の・と} が懸命だ・が間違いだ・が違う・が悪い・が良い; {こと・とということ・の・と} が結構だ・が珍しい・が大変だ・に驚く; {の・と} が無理だ・当然だ; {の・と} あさはかだ・あさましい・変だ・おかしい・失礼だ;
- (III) Semi-factive verb: {こと・と・の} を発見する; {こと・とということ} をわかる; {の} を手伝う・受け流す・受け止める;

また命題指示の「こと」は次のような修飾が可能である。

- (20) {間違った・本当の} ことを信じて {いる・いない}。

不定命題 次が不定命題を指示する動詞由来の名詞とその節による言い換えの例である。

- (21) a. 米軍の出兵は疑問だ。  
b. 米軍が出兵するかどうかは疑問だ。  
c. 米軍の出兵については {分からない・不明だ・知らない}。  
d. 米軍が出兵するかどうか (について) は {分からない・不明だ・知らない}。

- (22) 過去の地域開発立法との整合性を理由に、当初、法案提出に疑問を呈していた大蔵省が最終的に同意したのも,...[朝日新聞,1983年4月27日]

事実 次が事実を指示する動詞由来の名詞とその節による言い換えの例である。

- (23) a. 米軍の出兵を知った。  
b. 米軍が出兵した {こと・の・事実} を知った。
- (24) a. 今日、新聞で柏崎の「痴娼の家」の閉館を知った。[朝日新聞,1983年3月19日]  
b. この騒ぎを知った近くに住む塩島さんも... [朝日新聞,1983年4月12日]

---

(IV) Indifferent factive verb: {こと・ということ・と} を謝る・を発表する・を考える・を教える・を悟る・を説明する・を信じる・を知らせる; {こと・の・と} を怪しむ・をひがむ・を誉める・を悔やむ・を悩む・をとがめる・を喜ぶ

(V) Counterfactive verb: {と} 誤解する・早合点する・勘違いする

(VI) Implicative verb: {こと・ということ} になる; {こと・ということ・の・というの} が事実だ; {ということ・というの} が本当だ; {というの} が嘘だ; {こと・の} を断る

(VII) If-verb: {こと・ということ} が判明する・が確かだ; {こと・ということ・の・というの} が明らかだ; {こと・ということ・の} を確かめる; {こと・というの} を意味する・を示す・を証明する; {こと・の} を防ぐ・を妨げる; {の} を味わう・を聞く・を見る・をさえぎる; {の・と} を感じる

(VIII) Only-if-verb: {こと・ということ} がありうる・可能だ; {というの} が疑わしい;

(IX) Noncommittal: {こと・ということ} が必要だ・が大切だ・を検討する・を賛成する・を承知する; {こと・の} が簡単だ・がやさしい・が自由だ・を楽しみにする・をとめる・を夢見る; {こと・ということ・の・というの} が難しい; {と} 判断する・答える・思う・尋ねる・疑う・噂する・呼ぶ・言う; {こと} を覚悟する・を期待する・を禁止する; {こと・と} を決める・を明示する・を願う・を薦める・を誓う・を要求する; {こと・ということ・と} を説教する・を主張する・を提案する・を予言する; {こと・の・と} を恐れる

但し、「とが」という連鎖は実際は「とは」となり、「とを」は「と」になる。そして、その結果、momentary, easiness, emotive, opinoin, impression, true, positive will, negative emotion, communicative, indicative という意味に分類し、節+「こと・ということ・と・の・というの」が多様な解釈が可能であることを整理している。

これらの研究は本稿の研究におおいに関係があるが、しかし、これらの研究では、Nakau(1973)の「事実・話・噂・問題」などへの言及を除いて、名詞による指示を扱ってはいない。

- c. 夫の愛人の妊娠により夫の裏切りを知った妻は...[朝日新聞,1983年2月25日]
- d. 別れて三年近くの歳月を経てなお、自分たちを気づかってくれる小学校時代の校長先生の存在を知った時、...[朝日新聞,1983年9月20日]
- e. 日本史の上でのこの国の存在と、その使節の来航を忘れることはできないのである。[渤海,19]

説 次が説を指示する動詞由来の名詞とその節による言い換えの例である。<sup>10</sup>

- (25) a. 米軍の出兵を推測させた。
- b. 米軍が出兵したのではないかと推測させた。
  
- (26) a. 土井さんの致命傷は鉄パイプの強打による頭骨の陥没で、即死と推定される。  
[朝日新聞,1983年4月26日]
- b. ゴールデンウィークを前に、... 一気に夏到来を思わせた。[朝日新聞,1983年4月26日]

説は「と」格の場合、「こと」ではなく、「もの」で置き換えることができる。

- (27) a. その後は京中で市井人とも交易が展開されたものと推定される。[渤海,118]
- b. ... 市井の商人が、割り込みはじめたことを示すものと考えられる。[渤海,119]

内容 次が内容を指示する動詞由来の名詞とその節による言い換えの例である。<sup>11</sup>

<sup>10</sup> 「を」格を取るためには(25-26)のように、受動態の方がいいようである。能動態では少し容認度が落ちる。それは、この類の動詞が命題類を「と」格で取るせいであろう。しかし、可能表現ではよくなる。

- (i) ??米軍の出兵を推測した。
- (ii) 米軍の出兵を推測できた。

<sup>11</sup> 「を聞く」は「という」が付かない例も見られる。

- (i) 食堂経営高橋克己さん(39) =写真=が発見したのは、昨年九月ごろ、食堂に来たダンプの運転手から、化石がたくさん出ているのを聞いたのがきっかけ。[朝日新聞,1983年5月12日]
  - (ii) レナーが19アンダーで終わったのを聞いて...[朝日新聞,1983年2月14日]
  - (iii) 知り合いの少女(15)が少年三人から暴行を受けたことを聞いて...[朝日新聞,1983年6月26日]
  - (iv) 役場で天蚕センターの管理人を募集しているのを聞いて飛びついた。[朝日新聞,1983年1月26日]
- しかし、次の「の」は「を」格の関係節化である。

- (a) これは師匠がお客に話してるのを聞いたんですが...[朝日新聞,1983年5月12日]
- (b) 子どもの方から話すのを聞いてあげて下さい。[朝日新聞,1983年3月26日]

- (28) a. 米軍の出兵を聞いた。  
b. 米軍が出兵したという {こと・の・話} を聞いた。
- (29) a. 中止決定を聞いた鎌ヶ谷の選手たちは...[朝日新聞,1983 年 7 月 18 日]  
b. 故郷の歯科医師の退職を聞いて...[朝日新聞,1983 年 5 月 28 日]  
c. 遺体発見を聞いて, 親類らが駆けつけた。[朝日新聞,1983 年 3 月 19 日]  
d. 兄の戦死を聞かされた時の思い出もまた新たに回想されるのであろう。[朝日新聞,1983 年 8 月 19 日]  
e. ...「だって先生、読本にあるじゃないですか」といわれた, という話を聞いた。  
[朝日新聞,1983 年 2 月 15 日]

また, 内容の「こと」の場合, 次のような修飾が可能である。

- (30) 立ち入った・ばかなことを聞く。

**動詞由来名詞におけるイベント類指示と命題指示の関係** 以上の事実を考察すると, 動詞由来の名詞は, その共起する述語に従ってイベント類も命題類も指示できるということがわかる。しかし, 本来的には動詞由来の名詞はイベント類を指示しているのであるから, 命題類を指示するというのは二次的なものである。従って, 次のような constraint としてこれは定式化できる。

イベント類 ⇒ 命題類

一方, 命題類を指示する本来的な名詞である「事実・命題・説」等はイベント類を指示できない。

- (31) a. \* 昨夜, {事実・命題・説} が二回起こった。  
b. \* 昨夜, {事実・命題・説} が続いた。  
c. \* 昨夜, {事実・命題・説} をした。  
d. \* 昨夜, {事実・命題・説} を続けた。

従って, 上の constraint の逆は必ずしも成立しない。

#### 4 命題類・イベント類への非動詞由来名詞による指示

動詞由来の名詞類が, 命題類解釈とイベント類解釈において曖昧であることは, すでに述べた通りであるが, 動詞由来でない名詞もまたイベント類を指示できる。

## 4.1 イベント類への非動詞由来名詞による指示

イベントで動詞由来でない名詞は、次のような現象・事件・犯罪などがある。

(32) 神戸で地震が起こる。

これらは元来イベントというカテゴリーの下位カテゴリーである。カテゴリー  $C_1$  がカテゴリー  $C_2$  の下位カテゴリーであるという関係を

$$C_1 < C_2$$

と表すと、(32) でのイベント指示は次のように表示できる。但し  $e$  は指示対象のイベントである。

$e$ : 地震, 地震 < イベント

しかし、行為や過程の中には、(33) のように場所や曲のように本来行為や過程ではないのに行為や過程である演劇・演奏などを指示できる。

(33) a. 舞台が終わった。  
b. 第九が延々と続いた。

これらは次のような言い換えが可能である。

(34) a. 舞台での演技が終わった。  
b. 第九の演奏が延々と続いた。

これは、constraint によって次のように表示できる。

舞台 < 行為をする場所, 行為をする場所  $\implies$  行為

第九 < 曲, 曲  $\implies$  演奏

そして次のカテゴリー変換規則によって (33) を説明することができる。

(35)  $C < C', C' \implies C''$  ならば  $C < C''$

これによって「舞台」は「行為」の下位カテゴリーとなり、「第九」は「演奏」の下位カテゴリーとなる。

行為過程は (36) のように嗜好品やゲーム種などで習慣やそのプレイを指示するという事で非動詞由来名詞で指示できる。

(36) a. たばこを止めた。

- b. DOOM にはまっています。[DU9,124](DOOM とはゲームの名前)
- c. 絵を楽しむ。

従って、次のように言い換えることができる。

- (37) a. たばこを吸うという習慣を止めた。
- b. DOOM で遊ぶことにはまっています。
- c. 絵の鑑賞を楽しむ。

次のような constraint と (35) によってこのような現象が説明できる。

たばこ < 嗜好品, 嗜好品  $\Rightarrow$  嗜好品を楽しむ習慣

DOOM < ゲーム, ゲーム  $\Rightarrow$  ゲームで遊ぶ行為過程

絵 < 鑑賞対象, 鑑賞対象  $\Rightarrow$  鑑賞対象を鑑賞する行為過程

このようにイベント類もまた動詞由来の名詞類以外でも指示されるのである。

#### 4.2 命題類への非動詞由来名詞による指示

先にも述べたが、命題類への指示は本来的には、「事実・命題・問題・条件・策・説・内容・知識・信念・疑問・情報」等の動詞由来でない抽象名詞で行われる。

- (38) a. 事実: 入念に鍵をまわし、その事実を忘れぬように記憶し...[朝日新聞,1983 年 6 月 6 日]
- b. 命題: ... 両津は、タクシーで球場に向かい始めたところで中止の報を聞き...[朝日新聞,1983 年 7 月 18 日]
- c. 不定命題: 狩猟採集民の山についての考え方もすっかりかわってしまうのかどうかという問題もあります。[アイヌ学,202]
- d. 内容: ... 全校生徒が思い思いの内容を考え...[朝日新聞,1983 年 9 月 13 日]
- e. 説: ... アイヌ=白人説というのはまちがっていた...[「アイヌ学」,21]

また、命題態度動詞由来の名詞、「考え・推測・推定・疑い」等も、その行為やイベントではなく、その内容という意味で命題類を指示できる。例えば、次を参照せよ。

- (39) a. 推測はやめろ。(行為)
- b. 推測は間違っていた。(説)

さらに、次のように形容詞の名詞化や特定性が低い抽象名詞などの属性・概念・役割を表すによって命題類は指示可能である。それは、3 節で示したような節への言い換えが可能なことからわかる。

- (40) a. ... 歩行者への危険性を考え, ... [朝日新聞,1983 年 10 月 31 日]  
 b. 筆者もまた訪れたことがないので, その美しさは想像するしかないが, [渤海,46]  
 c. 彼は自分の責任の重みに気付いている。  
 d. 彼は山の恐さを {知っている・聞いた}。  
 e. その位置が確定していない。[渤海,48]  
 f. その目的は推察できるというものである。[渤海,67]  
 g. そこにいる植物や動物の種類、人種はいっさい不明。  
 h. あろうことか、編集部に来たもうひとつの物件も、送り元が不明である。
- (41) a. ... 歩行者が危険ではないかということを考え, ... (説)  
 b. 筆者もまた訪れたことがないので, そこがどれほど美しいかは想像するしかないが, (不定命題)  
 c. 彼は自分の責任が重いということに気付いている。(事実)  
 d. 彼は山が恐いということ {知っている・聞いた}。(事実・内容)  
 e. それがどの位置にあるかが確定していない。(不定命題)  
 f. どんな植物や動物がいるのか、人種についてはいっさい不明。[TW9412, 115]  
 (不定命題)  
 g. その目的が何である(の)かは推察できるというものである。(不定命題)  
 h. あろうことか、編集部に来たもうひとつの物件も、誰によって届けられたのかが不明である。[TW9412, 114] (不定命題)

「危険性・重み・美しさ・恐さ」などの属性の名詞は、不定命題・説・事実・内容、つまりいつれの命題類をも指示するようになり、また、「目的・位置」などの概念<sup>12</sup>の名詞、「送り元」などの役割<sup>13</sup>の名詞は不定命題を指示するようになっている。このような非動詞由来名詞による命題類指示は次のような constraint によって定式化できる。

(42) a. 属性 ⇒ 命題類

<sup>12</sup>ここでいう「概念」とは、特定の対象に対するものとして用いている。例えば、「数」という概念に対し、「1・2・3」はその特定の対象であり、また、「位置」という概念に対し、「北緯35度西経120度」というのはその特定の対象である。

<sup>13</sup>ここでいう役割とは、「田中」という特定の対象に対するもので、しかもその種類などの本質的な属性を表していないもので、何等かの関係において相対的に決定される属性のことをいう。「社長・話し手・送り元」などがそうである。



b. 概念  $\implies$  不定命題

c. 役割  $\implies$  不定命題

また、個体を表す表現が説や命題を指示することがある。

(43) 私は正しいが君は間違っている。

という表現は、よく考えてみると奇妙である。正しい、間違っているという述語は決して個体を叙述するものではなく、先に述べたとおり、説や命題を取るものであるからである。(43) であらわされる内容は、(44) などの表現で言い換えることができる。

(44) 私の考えは正しいが君の考えは間違っている。

また、「知っている」は事実・不定命題を取るが、それらの代わりに個体を選択することもある。しかし、その場合も不定命題として解釈されていることは、次の例が同じことをあらわしていることからわかる。

(45) a. 僕は田中を知っている。

b. 僕は田中とは誰であるか知っている。

また、個体は、「のこと」を付加することができる。この場合は次のように「の事実」で置き換えることができるので、命題を表しているといえる。

(46) a. 僕は田中のことを知っている。

b. 僕は田中についての事実を知っている。

このような個体の名詞による命題類指示は次のような constraint によって定式化できる。

(47) 個体  $\implies$  命題類

特に、「のこと」は個体からそれについての命題への変換を行なう関数のような働きをしているものといえ、その意味を次のように定式化できる。

のこと : 個体  $\implies$  命題

特定の談話においてのみ命題類を指示できる名詞もある。例えば、

(48) a. 猫は合っているが犬は間違っている。

b. 一は合っているが三は間違っている。

これらの文は一読した限りナンセンスであるが、

- (49) a. 今日、田中にあったら、猫は中近東が原産で、犬はヨーロッパが原産だ、と  
 いったよ。でも、猫は合っているけど、犬は間違っているね。  
 b. この問題には一から三までの答えが用意されているが、一は合っているが三  
 は間違っているね。二はちょっと分からない。

というような、文脈で「犬・猫・一・二・三」でその情報を指示するという意図が明らかになっている場合は可能である。このような場合は、constraintではなく、2節のオムレツの例のように個々の状況において次のような channel が存在し、その場限りで命題類を指示していると形式化できる。つまり、次のような channel に相当するものが話者の間で共有されていなければならない。

$$f: \text{「猫」} \mapsto p_1, p_1: \text{猫は中近東が原産である}$$

また、このような変換は「の方」のような表現に相当する。

- (50) 今日、田中にあったら、猫は中近東が原産で、犬はヨーロッパが原産だ、と  
 いったよ。でも、猫の方は合っているけど、犬の方は間違っているね。

つまり、「の方」は上の  $f$  のような機能を持っているといえる。

このように談話レベルでは、多様な表現がその文脈や状況が許す限りにおいて、命題類を指示することが可能となる。

## 5 まとめ

本稿では、まず、「こと」名詞や文内容を表すとされている名詞を動詞由来の名詞に限って、命題類・イベント類に分類し、さらに、それぞれを命題・不定命題・説・内容、イベント・過程・行為・行為継続に分類した。次に、動詞由来でない名詞もこれらのカテゴリーを指示することがあることを示し、それを constraint と channel という概念で形式化した。

本稿では、主にカテゴリーの分類に中心が移り、本稿で示した以上の、動詞由来でない名詞による命題類への指示についての網羅的な記述はできなかったが、これ以上の考察は次の機会にしたい。

### 謝辞

本研究は日本学術振興会からの特別研究員への補助、および文部省科学研究費によって補助されています。

本稿は、「命題類への指示」(1994年5月, 関東日本語文法談話会)を書き直したもので, その場において建設的な意見を下さったみなさまへ感謝の意を表したいとおもいます。また, 本稿の査読に当たっていただいた草薙裕先生に感謝の意を表したいと思います。

### 参考文献

- Asher, N. (1993). *Reference to Abstract Objects in Discourse*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Barwsie, J. (1993). Constraints, Channels, and the Flow of Information, in P. Aczel et al. eds. (1993), *Situation Theory and Its Applications: Volume 3*, Stanford: CSLI, 3-27.
- Davidson, D. (1980). *Essays on Actions and Events*. Oxford: Clarendon Press.
- Fauconnier, G. (1985). *Mental Spaces*. Cambridge: The MIT Press.
- Fillmore, C. J. (1968). The case for case. In Bach, E. and Harms, R. T., editors, *Universals in Linguistic Theory*, New York: Holt, Rinehart & Winston, pages 1-90.
- Harada, S. (1972). Contrastive Studies of English and Japanese (6): Sentence Patterns, *Journal of English Teaching* 5:4, 243-250.
- Inoue, M. (1974). *A Study of Japanese: Predicate Complement Constructions*, University of California Ph. D. dissertation.
- Josephs, L. (1972). *Selected Problems in the Analysis of Embedded Sentences in Japanese*, Harvard University Ph. D. dissertation.
- Kiparsky, P. and Kiparsky, C. (1970). Fact. In Bierwich, M. and Heidolph, K., editors, *Progress in Linguistics*, The Hague: Mouton.
- 久野すすむ (1973). 『日本文法研究』, 東京: 大修館書店.
- Nakau, N. (1973). *Sentential Complementation in Japanese*, Tokyo: Kenkyusha.
- 中右実. (1994). 『認知意味論の原理』. 東京: 大修館書店.
- Peterson, P. L. (1982). Anaphoric Reference to Facts, Propositions, and Events. *Linguistics and Philosophy* 5, 235-76.
- Peterson, P. L. (1994). Facts, Events, and Semantic Emphasis in Causal Statements. *The Monist* 77-2, 217-238.
- 田窪行則. (1992). 「「かつどんが食い逃げをした」<語用論的関数と同定原則>」. 『言語』, 21-7. 28-31頁.
- Smith, D. (1970). *A Study of Japanese Sentential Complement Constructions*, University of Michigan Ph. D. dissertation.

- Thomason, R. H. (1985). Some Issues Concerning the Interpretation of Derived and Gerundive Nominals. *Linguistics and Philosophy* 8, 73-88.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.
- Watanabe, K. (1972). Japanese Complementizers, in *Studies in East Asian Syntax*, UCLA Papers in Syntax 3, 87-133. New York: Cornell University Press.
- Zucchi, A. (1993). *The Language of Propositions and Events: Issues in the Syntax and Semantics of Nominalization*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.

## Reference to Propositionals and Eventualities in Japanese

Norihiro Ogata

In this paper we shall regard the classification of reference to propositionals and eventualities in Japanese.

Firstly, we shall classify propositionals into *propositions*, *indefinite propositions*, *facts*, *contents* and *theories*, and eventualities into *events*, *processes*, *actions* and *active processes*, obeying the method of Vendler(1967) and Asher(1993). Secondly, we shall describe on the derivative nominals by the method, and then we shall describe and formalize reference to propositionals and eventualities by non-derived nominals, using the concept of *open connector* and *closed connector* of Fauconnier(1985).

In the sequel, we shall clarify the principle of reference to propositionals and eventualities in the Japanese discourse and the importance of its role in the Japanese discourse.